

高齢社会をよくする女性の会報

No.105 1998年8月発行

高齢社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL. 03-3356-3564
FAX. 03-3355-6427
郵便振替 00100-0-79477



▲写真は近藤局長に要望書を提出する樋口代表と、右から中村雪江理事、谷嶋陽子理事、沖藤典子理事、松村満美子運営委員

— 目 次 —

家族介護調査	1
シニアシングル研究会報告	3
リレー・エッセイ④久世須磨子	6
男・老いを語る⑦池田省三	7
本の紹介、事務局だより	8

家族介護調査完了！ 要望書を厚生省に提出

一九九七年度財団法人東京女性財団助成研究事業として「家族介護調査」を昨年度実施し、多くの会員、特にグループ会員のネットワークを通じて八九七票の調査票を回収することができました。直接調査にあたってくださった方はもちろんのこと、ご協力いただいた皆様にお礼を申し上げるとともに、報告書が出来上がったことをお知らせいたします。

要 望 書

ずしりと重いこの「家族介護についての実態調査」。この重さには、全国の会員の皆様のご協力と介護を担う家族の人生が込められています。今回の調査から直接浮かび上がってきた問題点をもとに、運営委員会は介護政策に関する要望書を作成、厚生省に持参しました。折しも前夜の組閣で厚生大臣が交替したばかり。宮下創平厚相に代わって、介護保険実施の重責を担う近藤純五郎老人保健福祉局長が私たちの要望に耳を傾けてくださいました。(樋口恵子・記)

私たち「高齢社会をよくする女性の会」は、一九九七年、東京女性財団の助成を受けて十年ぶりに在宅介護者実態調査に取り組みました。

その結果は別添の調査報告書のとおり福祉サービス利用者は五割から七割へ二〇ポイント上昇、手続き簡素化等にも改善の跡が見られることは高く評価したいと思います。

一方、介護する家族の状況は一層深刻化し、在宅介護が限界に近いことも明らかにしています。調査結果と自由回答欄にあふれる介護者の生の声をふまえて、私たちはつぎのような政策がただちに実現されることを心より要望いたします。

一、ショートステイ、デイサービスの二層の充実

少子化と雇用者世帯の急増を反映し、一時期に複数を介護している人が二・五%もいます。自分と配偶者双方の親を多重介護する例、舅姑（父母）と配偶者二世帯をケアする多層介護の増加が目立ちます。

介護の長期化も著しく、平均七・三年。長期化多重化そして症状の重度化する介護を支えるには、いつでも希望するとき利用できるショートステイ、デイサービスが必要で

す。多様な背景を持つ利用者に、適切なサービス提供のためのショートステイ、デイサービスの介護の力量アップのための研究をすすめ、専門家の養成を望みます。一時預かり制度の充実・拡大を望む声は調査に見るとおり極めて高く、疲れ切った介護者が切実に要望するものです。

二、「在宅」の日常性をもつグループホームの充実

十年前とくらべ「寝たきり」は減少、痴呆の増加が目立ちます。二四時間ケアが必要な、痴呆をはじめとする高齢者には、住み慣れた場所、自由な日常生活を

保障された少人数のグループホームが数多くつくられることを望みます。

痴呆の方の介護の負担は、決して痴呆の軽重によるものではなく、軽くても家族の対応の困難さに変わりありません。

三、仕事と両立する介護サービスの充実

介護のため仕事をやめざるを得ない女性の嘆きが相変わらず多い反面、仕事を続けたい希望が強くなっています。高齢社会を支える財源面からも、介護者が仕事を続け得るといふ視点からの介護サービスの提供を望みます。

四、健康診断など介護者のためのケア

介護者の五〇%は医者通い、さらに二〇%は自覚症状があるのに通院できないでいます。介護者のための定期的健康診断、通院のための一時預かりあるいはホームヘルパー派遣制度の確立をお願いします。

五、介護者のための当事者グループ助成

介護者は社会的孤立に悩み、日常的な対話、同じ悩みを持つ人との交流を望んでいます。介護者たちが励まし合い、体験を社会的に前向きな提言に生かせるよ

うな当事者グループの形成を支援してください。介護者の中から、体験を交流しつつ働ける場づくりなどのアイデアが出されています。

六、世代別のきめ細かな介護者サービスを

介護者の年代により、抱える問題はさまざまです。介護者の多くは、介護者であるばかりでなく、母であり、妻であり、主婦であり、祖母であり、そして職場の一員であり、家業の担い手であり、地域の支え手でもあり、すべてが重要な役割であることに配慮したきめ細かなサービスを期待します。介護だけに専念できる介護者はほとんどいないという認識から、在宅サービス政策を立案されるよう望みます。

高齢の介護者の健康は蝕まれ共倒れの危機にあります。

少し若い世代は、自身の更年期・夫の定年・子の自立、ときには自分の仕事と介護と孫育てとのほさまにいます。

さらに若い世代では、親の介護と思春期・幼年期の子育てへの配慮に悩んでいます。

七、虐待防止に周囲の関心

濃密で単一な家族関係の中で、お年寄りへの虐待が少なくないことが分かりました。日本の場合虐待の温床は、英米の調査結果とは異なり「在宅」の密室化と介護の一極集中、出口なしのストレスです。介護者、要介護者双方の社会参加をすすめ、虐待に関して周囲の関心を高めて防止するキャンペーンが必要です。

八、往診できる医療機関の充実

この願いは十年前から引き続き切実です。「在宅死」とか「在宅ホスピス」と言

われますが、死亡診断書の書き手がいなかったら在宅で死ねません。

往診なくして在宅で死ねず。

九、介護における男女共同参画

介護の負担は今なお女性に一極集中しています。しかし急速な少子・高齢化の変容を見ると、まもなく男性も介護参加せざるを得ません。

各部サービス利用への積極性、家族介護への参加・参画をはじめ、意識・行動面での男性の変化を支援する政策を望みます。

老いても一人で安全に暮らすために

シニアシングル研究会

七月十日(金) 東京ウイメンズプラザの視聴覚室で行われ、会員以外の参加も多く、百人以上の人々が熱心に耳を傾けた。樋口代表の泥棒被害体験談に続いて警視庁生活安全部の佐々木真郎警視正のお話と濱田忠臣警部のミニチュアを使つての戸締りの実演、セコムの加藤善次郎さんのお話と続きその後活発な質問が出

て、一時半から四時半の三時間があつたという間に過ぎ、時間が足りないくらい熱気にあふれた例会となった。

わが泥棒被害体験記

樋口 恵子

連休直前の四月二八日、夜、帰宅したら、わが家に泥棒が入っていました。人

以上、今回の調査結果から直接浮かび上がってきた要望のうち、主なものをまとめました。

まだたくさん普遍性を持つ個別の願いと悩みが、この報告書に包まれています。介護保険導入前夜、厚生行政への国民の期待は多大なものがあります。日本の未来を構築する重要な柱として、介護をめぐる福祉政策のなかに、この報告書に込められた内容を生かしてくださいませようお願い申し上げます。

生初体験です。被害総額は現金約六十万円。家族三人の現金を嗅覚鋭くかき集め、講演謝金の入ったハンドバッグは、ちゃんと止め金を掛け、のし袋はもと通り畳んで中身だけ消えていました。母が虎の子を投じて買った形見のダイヤをはじめ貴金属数点。金額総計すればこちらのほうがはるかに高く、思い出を語ればヨヨと泣きたくなる品ばかり。ほかに人民元、ドル札少々。

賊は白昼、生け垣が茂って死角になっている一階テラスの二重ガラスを突き破

犯行の実態と犯罪者の心理

(平成8年中に検挙された空き巣狙いの被疑者35名について調査)

1. 狙う周辺の下見状況(単回答)		トップは「玄関」と「窓」が	31%
・下見をする	54%	ベランダ	26%
・下見をしない	46%	縁側	11%
※目の付けどころ(複数回答)		※侵入方法は(単回答)	
・人通りや人の目が少ない	47%	・窓ガラスを破りクレセントを外す	40%
・入りやすく逃げやすい	42%	・戸締りをしていないところを探す	31%
・留守の家が多い	37%	・隠している合鍵を探す	11%
2. 狙う住宅		4. 狙いやすい窓(単回答)	
トップは「戸建て」と「マンション」		トップは「掃き出し窓」で	49%
が(単回答)	34%	5. 侵入するためにどの位時間をかけるか	
※選んだ理由は(複数回答)		(単回答)	
・窓ガラスを破りクレセントを外せば		侵入口の防犯設備が破壊行為に10分間	
簡単に入ることができる家が多い	40%	持ちこたえることができれば91.0%の	
・人目につきにくい家が多い	31%	ドロボーが侵入をあきらめる。	
・戸締まりをしていない家が多い	30%	※侵入にかける時間	
・現金を置いている家が多い	29%	・2分	17%
・ベランダに昇りやすい家が多い	17%	・2分を超え5分以内	51%
3. 侵入口(単回答)		・5分を超え10分以内	23%

り、クレセントの鍵を開けて侵入、家中を現金と平凡な貴金属専門に奪って、窓は全部開けて逃げ道を確認、かつカーテンを元通りにしてあったので、発見には時間がかかりました。

一一〇番して一〇分後に交番、二二分後に警察署から到着、泥棒はプロらしく指紋などは見つからなかったようです。泥棒に入られて、なんだか理不尽に体の隅々を点検されたような、不快さからくる無力感で一週間ほど何も手につきませんでした。これぞPTSD(心的外傷後ストレス障害)。泥棒も一種の暴力だと痛感しました。鉄柵を取りつけるなど、少し防犯対策をし五月のロンドン行きを一日延ばしてセコムを入れました。六月末、今度は二階の北窓を破って泥棒が入り、セコムの警報がしつこく発報するので、五分ほどして立ち去ったそうです。実は八月初め世田谷で逮捕された泥棒がわが家のあとのほうを自供したそうで、この男・六十九歳。泥棒の世界も高齢化が押し寄せています。

安全対策は、シニ研はじめ当会が取り組む大テーマだと実感した体験でした。

警視庁生活安全部生活安全総務課長
佐々木真郎警視正のお話

「本来高齢者は、青、壮年程外へ出ないし、寝たきりのお年寄りもおられることから、犯罪に合う確率は低かったのですが、近年働く高齢者、社会参加する高齢者、元気なお年寄りが増えたことから高齢者が犯罪被害に合うようになってきました。これは高齢人口の伸び以上の増え方で、平成五年と比べて平成九年は警視庁管内で四割増。人口増は二割弱だから、はつきり高齢者が被害に合うケースが増えていると言えます。一方、犯罪を犯すお年寄りも増えていまして、平成元年と比べて平成九年は約二倍、人口増を考えても倍増しているのです。これも元気なお年寄りが増えたということでしょうか。

女性の高齢者に一番気をつけて欲しいのがひったくり、夜道の一人歩きなどは不良少年達のかっこうの餌食となるので

▼佐々木真郎警視正



注意して欲しいと思います。又悪質商法も一人暮らしのお年寄りの女性をねらっています。東京電力の社員を装って漏電が心配だからとコンセントをちよつと修理

したふりをして高い金額を要求したり。最近ではこの電力会社の社員を装った犯人が捕まりましたのでその裁判費用、十万円をとりあえず立てかえれば、後で全額戻りますというのもありました。その他ガス漏れの検査とか、消火器を売りつけたりなどあの手この手でお年寄りをねらっています。

ドロボー対策としてはワンドアツールロック、侵入するのに十分以上は掛けないので、先ず入りにくくすることです。そして仏壇、タンス、鏡台に現金を入れたら取られるのが当然ということになります。隠すのなら本の間、力持ちならタタミの下、冷蔵庫の中とか。預金通帳と印カンを同じ所に仕舞うのもキケンです。鍵を

▼濱田忠臣警部



鉢の下やポストに入れて置くのなどもつてのほかです。ドロボーが一番恐いのは近所の目ですから日頃から近隣と親しくすることも大切です。又街並み自体ゴバン

の目の道では通り抜けるだけの人も通過しますが、袋小路とかマンションでも二三軒しか使わない入口に無関係な人が入りこめば声を掛けやすくなるなど環境設計による防犯都市作りも考える必要があるでしょう。

警察としても防犯の為の啓蒙活動を各種やっておりますので、皆様積極的に参加して下さい。

続いて防犯活動第一係長濱田忠臣警部が、ドライバー一本でクレセントの窓があげられることや、二重鍵の現物を見せながら有効な施錠の方法などくわしく説明して下さい、皆前の方に集って熱心に聞き入っていました。

次にセコム株式会社の加藤善次郎さん

▼セコムの加藤善次郎氏



が守衛さんの派遣業務からスタートしたセコムが二十年前から家庭用セキュリティシステムをはじめたこと、侵入を防ぐ、押売り、ガス漏れ、火災探知、急

病のSOSをカバーすることで、契約家庭が急成長して現在五二万世帯に達しているとのことでした。二四時間電話線を使って、各家庭の中に百個近く設置したセンサーが異常を感知すると、その家の内外に警報音を出すと同時に中央の司令センターでキャッチして五分〜十分でセコムの社員がかけつけるなど、システムや、利用の仕方、費用など、スライドを使ってくわしく説明して下さいました。

その後の質疑応答でも、プライバシーとかかねあいや、誤操作の問題、セコムの社員が百分信用出来るかなど、つっこんだ質問が出ましたが、誠実に答えて下さり、皆満足し、意義のある勉強会となりました。(松村満美子・記)

ネットワークは 拡げて 育てて

久世 須磨子



県では女性政策の総合的意識啓発の一

つとして「女と男のはあもにいフォーラム」を各ブロックの順に年一回開催されます。

昨年は私達の西濃大垣が会場でした。地域で活動している34団体と県や関係市町村がネットワークして実行委員会を組織し、新しくワークショップにも挑戦してみました。

その後行政とパートナーシップで身近かな問題解決のための一歩が動き出しています。

① 大垣市では女性センターづくりの第

一段階として「女性団体交流室」の開設の運びとなった。

② 揖斐郡池田町では「女性行動計画」の策定に当って「審議委員」の人選が進められようとしている。

③ 今年度の三県（鹿児島、宮城、岐阜）女性交流事業が鹿児島県で行われますが、昨年のワークショップのメンバーが分科会を担当することになり、テーマは「映画で何が変わる？ 何を変える？ パートII」です。

以上のように「はあもにいフォーラム」を開催することによってネットワークが

生まれ行政とのパートナーシップも育ち効果も現れております。

その他に県下の中に縁側の発想を生かして活動をしているグループがあります。気取らないで誰とでもおしゃべりができ、情報が交わされ、安心して話せる「場」としての「女性ネットワーク」です。

年に一度オープン企画として仲間が集う「縁側談義」が計画されます。

今年には板取スイス村を訪れ、村役場の職員や障害者の家族も参加され有意義な談義となりました。

一緒に縁側に腰かける事によってお互いに話し合い、学び合い、助け合うこともできていく、結びつきの力強さも感じさせてくれるそんな「ネットワーク」が育ちつつあります。

プロフィール
高齢社会をよくする女性の会・岐阜代表、岐阜県女性海外派遣団「落の会」副会長、大垣市連合婦人会顧問、配食サービス「なでしこ」代表

(今回は交渉中です)



戦後世代の「老い」

いけ だ しょう ぞう
池田省三

(財)地方自治総合研究所政策研究部長)

1946年生まれ。介護の社会化を進める1万人市民委員会運営委員。1993年に「自治労年金改革構想」を起草。著書に「介護保険法」(法律文化社)、最近の論文に「社会福祉政策を転換する介護保険」(ジュリスト/98年4月)、「介護保険と地方分権」(法律セミナー/98年9月)等。

介護保険とつきあってみて、いまの老年寄りは本当に我慢強いということがつくづくわかった。介護の社会化が遅れたのもこの我慢が最大の原因かもしれない。ところが、戦後世代はそうはいかない。よく言えば自己主張がある。悪く言えばわがままである。ところで、この二つは一見似ているが、実は全く異なったメンタリテイである。自己主張は他者との関係において成立し、わがまは他者を無視するものだからだ。自己主張は、つねに他者との調和を迫られる。では、この世代は、どちらのメンタリテイで「老い」を迎えるのだろうか。

この点で、介護の社会化を巡る論議はきわめて示唆的であった。論議の対立軸は三つあったといつてよい。

第一は、男性論理と男女共生論理の対立であり、「高齢社会をよくする女性の会」はその一方の旗頭であった。

第二は、世代間の対立である。与野党を問わず介護保険を推進したのは五十歳代の政治家であり、七十歳代の多くは隠

れた反対派であった。積極的に発言した研究者、市民団体メンバーも、ほとんどが五十歳代前半に集中している。

第三は、権威と論理の対立である。介護保険論議は、この国では珍しく徹底したデイベートとして展開された。官僚や保守政治という「権威」の前に、「いつてみるだけの批判」や「曖昧な妥協」で終わっていたものが、論理と論理が闘わされるという珍しい展開を示した。

戦後世代は、いまようやく「老い」への論議に参加しはじめた。そして、介護保険は、「老い」を考えるのが官僚でも保守政治でもなく、自分達自身でやることを教えた。自分達で考え、自分達で作るならば、実現できる最良の提案を行わなければならぬ。提案を実現するためには、合理的に説明し、合意を獲得しなければならぬ。この世代には、リアルな政策形成能力、市民合意への努力、そして変革への粘り強い意志が求められている。知識ファッションとしての批判的批判は過去の美学にすぎないのである。

『ビッグベビー』

沖藤典子著

(新潮社 一七〇〇円＋税)

ノンフィクション作家として高齢化対策の制度や政策への提言を続けてきた著者の、はじめての小説です。「制度・政策の充実以前の問題として、家族が何に悩み、苦しんでいるのか。人間の心のありよう、愛情も憎しみも深いからこそその悲しみのようなものを描いてみたかった」とあとがきにあります。小説といっても、これまでの取材活動に裏付けられたリアルな内容です。

老母と暮らしていた兄嫁が急死。不測の事態にもめる親族。介護問題は、親子の歴史、夫婦の過去をあぶり出します。老母をひきうけた娘夫婦もすでに六〇代——老母の介護は自分たちの老後の不安と重なって、様々な問題をはらんでいきます。福祉のサービスは？ 公的介護保険はどうなるのか？ 不公平な年金制度にも触れて、家族だけ女たちだけでは支えきれない老老介護の現実を描きます。

息子・娘世代、孫世代、誰にも他人事でない、社会的介護を考える本、男性も必読！です。

『バリアフリー』

井上由美子著

(中央法規出版 二二〇〇円)

「女が歩くようになって、世の中少し風通しがよくなった。21世紀はさらに、障害者と高齢者と子どもが加わって、この世の風景はようやくまくまっとうな姿になるだろう。井上由美子さんは、社会のノーマライゼーションをめざして、いつも先頭に立って歩いている。最初に出会い、ぶつかり、つまづいたことをゆたかな感性で検証し提案し、物心両面でバリアフリーへの道を拓いていく」と、当会樋口代表から身に余る推薦の言葉を頂戴した。私にとってバリアフリーは、「老人や障害者であるような関係を拒否し、一人の人間同士として当たり前につながりあえる暮らし」を実現するためのもの。道路や環境のハード的な側面だけにスポットが当てられがちなバリアフリーの、むしろソフト面を重視しています。福祉・バリアフリー入門書としても最適な一冊。映画『萌の朱雀』を誌上鑑賞しながら、福祉やバリアフリーの世界へご案内。

事務局だより

残暑御見舞申し上げます。

お暑さの中、お変わりございませんか。東海三県大会も近付きました。現地の実行委員の皆様は最後の追い込みでフル回転だと思います。その分事務局は楽をさせていただいてますが、みなさま体調にはくれぐれもお気をつけて、また一人でも多くの会員さんが参加されますようご案内申し上げます。

★八月例会は年金勉強会・パートⅢで満員の盛況。当会としての意見書をまとめ、厚生省に提出することで合意を得ました。内容の詳細は次号会報に掲載します。

★巻頭で代表が報告したとおり、多くの皆様のご協力で介護調査報告書ができ上がりました。調査にご協力くださった方には概要版を順次お送りしています。なお余部少々あり。ご希望の方は事務局まで問い合わせを。実費で頒布いたします。

★次のオープンハウスは九月二十八日(月)午前十一時～午後四時の予定です。どうぞお出かけください。(新井倭久子)